総　説

看護基礎教育におけるシャドーイング実習による学びについての国内の文献レビュー

清 水 裕 子，大 澤 康 子
群馬県立県民健康科学大学

目的：看護基礎教育におけるシャドーイング実習による学びについて整理し，本学の役割移行実習への示唆を得る．
方法：文献検索の結果，17 件の原著論文を分析対象とした．対象文献の研究目的や方法論などを検討し，シャドーイング実習による学びに関する結果のカテゴリーを抽出し，類似した内容ごとに再構成をしてテーマをつけた．
結果：シャドーイング実習の学びとして「患者の個別性をとらえた看護ケアの実際」「看護専門職としての姿勢や態度」などの 10 のテーマが明らかになり，看護過程の展開に必要な知識や技術の修得，看護職としての実務の理解，看護専門職者としてのあり様の理解の 3 つの効果が明らかになった．
結論：役割移行実習でシャドーイングの実習方法を用いることは適切であった．今後はロールモデルとなる看護師の選出，教員や指導者の意図的な関わりについて検討する必要性がある．

キーワード：看護基礎教育，シャドーイング実習，文献レビュー

Ⅰ．緒　　言

新人看護師の早期離職に焦点をあてた研究は 2004 年以降増え始め[1-4]，病院における看護職員の人員確保・定着や教育研修体制の整備等，さまざまな取り組みが行われている．2000 年ごろには離職率が 10％台で推移していたため，日本看護協会は 2004 年に「新卒看護職員の早期離職の実態調査」[5] を行った．その結果，病院側，学校側ともに新卒看護職員の職場定着を困難にしている要因として，上位 1 位から 3 位までに共通して「基礎教育終了時点の能力と看護現場で求める能力とのギャップ」，「現代の若者の精神的な未熟さや弱さ」，「看護職員に従来より高い能力が求められるようになってきている」を挙げていた．新卒看護職員は仕事を続ける上で悩みになったこととして「配属部署の専門的な知識・技術が不足している」，「医療事故を起こさないか不安である」，「基本的な看護技術が身についていない」を上位 3 位に挙げていた．この状況を契機とし，早期離職を解消するため日本看護協会は看護職員の臨床研修の制度化に向けて取り組みを始めた．これが，2009 年の看護師等の人材確保の促進に関する法律，ならびに保健師助産師看護師法の改正につながり，新人看護職員研修が努力義務化された．この努力義務化に先立ち，厚生労働省は 2009 年 12 月に新人看護職員研修ガイドラインを公表し，各医療機関ではガイドラインに基づいて研修の追加や修正を行っている．また，新人看護師の育成については，2007 年の雑誌「看護管理」において特集が組まれ[6,7]，シャドーイングによる新人看護師の教育が看護職員としてのアイデンティティの確立[8] や

連絡先：〒371－0052　群馬県前橋市上沖町 323－1
群馬県立県民健康科学大学
清水裕子

職場適応をスムーズにした[9]ことが報告されている．

一方で，看護基礎教育では2008年にカリキュラム改正が行われ,「看護の統合と実践」が新たに位置づけられた．臨地実習においては複数の患者受け持ちや一勤務帯を通した実習，夜間の実習も可能な範囲で実践することなどが留意点として挙げられ，実務に即した実習を行うことが望ましい[10]とされている．これにより看護学生から看護職員としての役割移行を促進する効果が期待されており，本学では卒業を控えた4年次生を対象にした自由科目「看護専門職の役割と機能Ⅱ-2（以下，役割移行実習)」が設定されている．

役割移行実習の目的は「学修者である看護学生と職業人である看護職者の役割及び機能の相違について学修し，直面した問題を学術的・自律的に解決する重要性を理解する」ことである．開講時期は看護師国家試験の受験後の2月下旬から3月上旬の2週間である．2021年度の履修生は1名であった．前任者の資料から，実習内容は学生が実習を通して修得したい知識および技術を検討して実習期間中の学習計画を立案し，チームメンバーとして看護実践に参加するものであった．しかし，新型コロナウィルス感染症流行下であり，かつ履修生のレディネスも不十分であったため，実習内容をスタッフ看護師のシャドーイングに変更した．病棟実習前にはオリエンテーション後に看護職者の発達過程や新人看護師が直面しやすい問題についての文献精読を行い，病棟実習後には学生と教員で学修活動を振り返り,評価を行った．役割移行実習を終え，履修生は「看護師として働くイメージがついた」,「看護師として働いていけるか不安を感じている学生のサポートになる」,「就職前に良い経験ができた」と評価し，教員側も目的が達成できたと評価した．しかし履修生が1名であり，本科目でのシャドーイング実習が履修生への学習効果をもたらしたと判断することはできなかった．

そこで，看護基礎教育におけるシャドーイング実習の学びに関する文献検討を行い，その効果について考察することで役割移行実習への示唆を得たいと考えた．

Ⅱ．研究目的

本研究の目的は，文献検討を通して看護基礎教育におけるシャドーイング実習の学びを類似性に沿って再構成し，明らかにすることである．その学びについて考察することで本学の役割移行実習への示唆を得る．

Ⅲ．用語の定義

シャドーイング実習：ロールモデルとして機能する看護師に同行し,看護の実践を経験することで,学内で学んだ知識を深めることができる実習方法[11]．シャドーイングとシャドウイングは明確に区別されていないため，本研究では文献レビューに用いた文献は表記のまま使用し，それ以外はシャドーイングで統一して記載した．

Ⅳ．方　　法

1．文献検索方法と文献選定手順

個別具体の状況を重視しながら現象を深く理解するためには，質的研究の手法が取られている[12]．看護基礎教育におけるシャドーイング実習による学生の学びを明らかにするためには,「シャドーイング実習による学生の学び」という現象を学生の認識や体験から理解する必要があると考え，今回の文献検討では質的研究を対象とした．

文献検索のデータベースは医中誌webを用い，検索期間は限定せずに文献検索を行った（参照日2022年8月1日）．検索式（シャドウイング/AL）

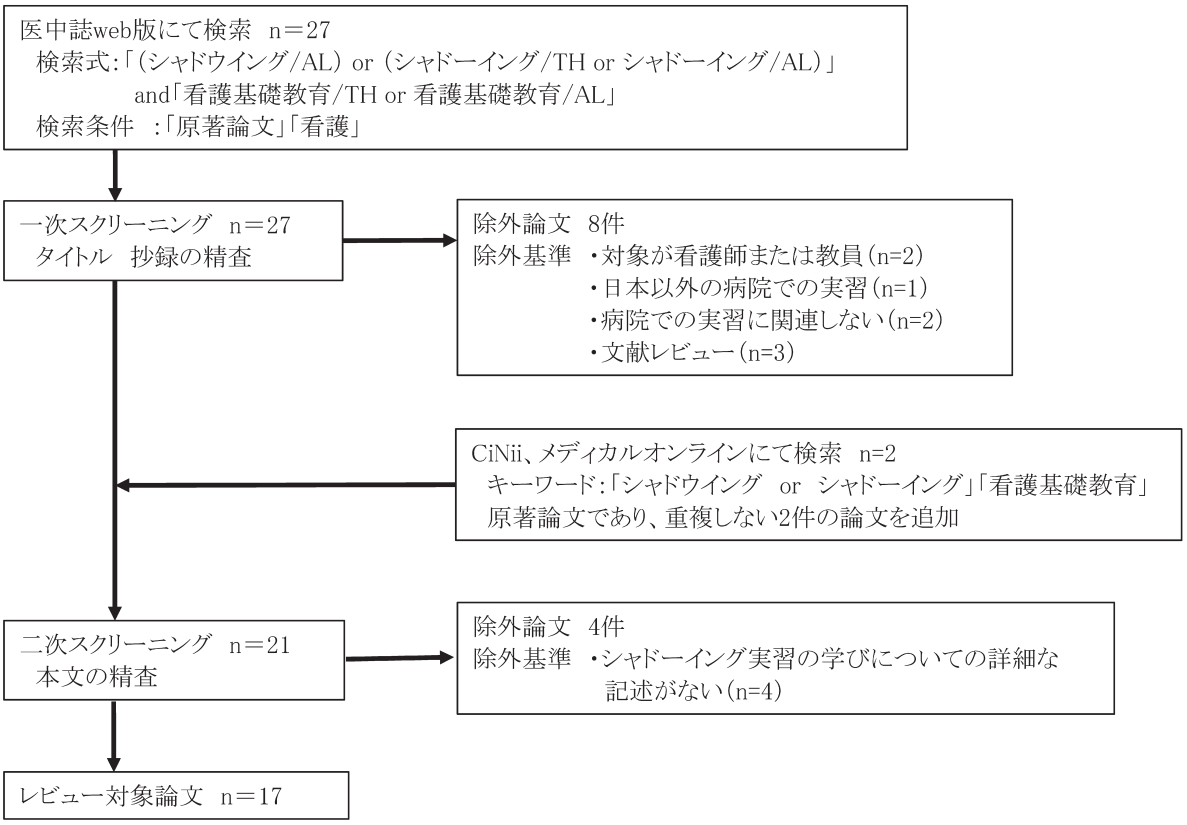

図１　文献の選定手順

or（シャドーイング/TH or シャドーイング/AL）and（看護基礎教育/TH or 看護基礎教育/AL）and（PT ＝原著論文　SB ＝看護）にて 27 件の文献が検出された（図 1）．一次スクリーニングでは 27 件のタイトルと抄録を読んで，対象が看護師または教員の論文や日本以外の病院での実習の論文などを除き，学生のシャドーイング実習による学びを明らかにしている論文を 19 件抽出した．その後メディカルオンライン，CiNii でも検索して 2 件追加し，21 件の文献を対象とした．二次スクリーニングでは研究者 2 名で 21 件を精読し，シャドーイング実習の学びについて記述が読み取れない 4 件を除外し，最終的に 17 件を分析対象とした．

２．分析方法

牧本[12] の質的研究のシステマティックレビューを参考に，文献選定には PICo（P：対象集団，I：焦点となる現象，Co：文脈 / 状況）の枠組みを用いた．

対象文献の著者，発行年，研究目的，研究デザイン，研究対象者，領域，実習スケジュールとシャドーイングの対象者，データ収集方法，シャドーイング実習による学びに関する結果のカテゴリーについてマトリックスを作成した．各文献のシャドーイング実習による学びについて結果で述べられているカテゴリーまたは自由記述をそれぞれ 1 記録単位とし，類似した内容ごとに再構成をして抽象度を上げたテーマをつけた．

分析結果の信用性を確保するため，共同研究者間で繰り返し討議して検討し，内容を確認した．

３．倫理的配慮

本研究で分析に使用した文献については，正確な引用に留意した．

Ⅴ．結　　果

１．対象文献の概要（表１）

対象文献は17件[13-29]であった．発表年は2013年4件，2014年2件，2015年2件，2016年1件，2017年4件，2018年1件，2019年1件，2020年2件であった．研究対象者は大学2年生1件，大学3年生3件，大学4年生4件，大学3～4年生1件，短期大学3年生2件，看護専門学校1年生2件，看護専門学校3年生3件，看護専門学校学年不明1件であった．領域は基礎看護学実習3件，成人看護学実習4件，精神看護学実習2件，統合実習8件であった．シャドーイング実習のスケジュールは実習期間中半日～1日7件，2日間2件，

表１　看護基礎教育におけるシャドーイング実習による学びの国内文献

文献番号	著者（発行年）	研究目的	研究デザイン	研究対象者	領域	実習スケジュールとシャドーイングの対象者	データ収集方法	結　　果
①	石渡智恵美（2020）	周手術期看護実習における看護実践能力育成方法としてシャドーイング実習を導入したので，その実習での学びと課題を明確にし，今後の看護実践能力育成方法の示唆を得る	質的研究	短期大学3年生	成人看護学実習（周手術期看護実習）	実習2日目（臨地実習初日），病棟内オリエンテーション後に看護師のシャドーイング（一日のみ）	学生の学びのレポート	シャドーイング実習での学び（6カテゴリー） ・全体・術前看護・術後看護・術当日看護 ・術後看護・チーム連携・看護技術 シャドーイング実習の意味 ・実習病棟の雰囲気が理解でき，実習初日の緊張感が軽減できた ・周手術期実習は速い展開を求められるので，病棟の一日流れを把握できてよかった ・担当の看護師さんから実習での学習方法のレクチャーをしてもらい，実習の進め方が理解できた ・看護技術（観察・ケア）方法が未熟なため，看護師さんの看護技術を見学し，学べる機会が得られた ・患者さんの術前の思いの引き出し方など，看護師さんの会話術をそばで学べてよい経験ができた ・面会時間に来た家族と看護師さんの関わりで，家族看護の大切さを学べてよかった ・看護師さんが複数術後患者を受け持ちながら効率よく看護をしていた場面が学べて勉強になった ・シャドーイングが実習開始日にできるとその後の受け持ち看護に役立てたので意味があると思った ・看護師さんと会話ができたことで，受け持ちでの担当時にスムーズに相談・報告ができた ・2年目の看護師さんが担当だったが，一つ一つ確認しながら実施する大切さを教わることができた ・看護師さんの看護観を確認する機会があり，このような看護師を目指したいと思った
②	竹﨑和子，高尾茂子（2019）	A大学の統合実習においてシャドーイングを中心に構成した看護管理実習での学生の学びを明らかにし，今後の課題を検討する	質的研究	大学4年生	統合実習（看護管理）	5日間の実習のうち，2日目と3日目に師長，リーダー，スタッフナースのシャドーイング	実習記録	「看護管理に関する役割・機能と責任の学び」（3カテゴリー） ・看護の質向上に向けた看護管理 ・安全管理の重要性についての理解 ・対人的サービスに必要な人材育成 「看護の専門性に関する学び」（2カテゴリー） ・チームの一員としての責任と役割の遂行 ・他職種との情報共有と協働
③	小林裕子，藤井光輝，片山善友ほか（2018）	1年次後期に実施している基礎看護学実習Ⅰ-②の看護師のシャドーイングにおける学生の学びを明らかにする	質的研究	看護専門学校 1年生	基礎看護学	4日間のうち前半の2日間 看護師のシャドーイング	実習1日目に記述した「看護師のシャドーイングを通しての学び」	学生の学びの中心性 ・状態の観察 学生の学びの塊（7つ） ・疾患の随伴症状の確認と判断した行動 ・バイタルサインの測定方法 ・皮膚の状態に留意 ・年齢や治療に伴う身体変化 ・患者の状態に応じた排泄援助 ・コミュニケーションによる情報収集や援助 ・自立に向けたADL拡大の援助
④	森　京子，古川智恵（2017）	A大学の成人看護学慢性領域におけるがん終末期看護学実習において学生が得た学びを明らかにすることを目的とする	質的研究	大学4年生	統合実習（成人看護学慢性領域）	2週間のうち4日間 看護師のシャドウイング	実習の最終レポート	講義とシャドウイングを併用したがん終末期看護学実習における学生の学び（7カテゴリー） ・がんと共に生きる人と家族を支える看護師の役割 ・がん患者の思いに寄り添う関わり ・信頼関係を基礎とした患者・看護師関係の重要性 ・垣根を越えたチームアプローチの重要性 ・在宅でその家族らしい最期を迎えるための支援 ・緩和ケアにおける医療者の姿勢 ・がん患者・家族の全人的苦痛・ニーズの捉え方
⑤	岡田麻里，今井多樹子，井上　誠ほか（2017）	3年次生が各論実習に臨む前に，既習の知識と技術を統合するために，多重課題に対応する演習とシャドウイング実習を体験した学生の学びを明らかにする	質的研究	大学3年生	統合実習	3日間 師長・リーダー・受け持ち看護師のシャドウイング	実習終了後に提出したまとめの総合レポート	多重課題演習とシャドウイグ実習から得た学び（7カテゴリー） ・メンバー看護師の自立の要件 ・多重課題に対応する実践的思考 ・チームナーシングの基盤となるスタッフ間の関係構築 ・病院組織としてのチーム管理 ・多職種チームによる的確な情報交換 ・患者中心の看護の提供 ・専門領域の看護実習に向けた自己の課題の明確化
⑥	岩坂信子，尾形裕子（2017）	継続統合看護学実習にシャドウイングを導入したことで学生がどのような看護マネジメントの学びを得たのか，シャドウイングの効果を検討することである	質的研究	大学4年生	統合実習	1週目は主に看護管理者やリーダー看護師，2週目の初日は受け持ち看護師のシャドウイング	発表資料	看護マネジメントに関する学生の学び（6カテゴリー） ・メンバーシップ力とその発揮の方法 ・業務に運用するための優先とする要因 ・看護管理者の役割 ・看護チームにおけるリーダーの役割と理解 ・多職種連携の実際と看護師としての役割発揮 ・職員，患者家族と信頼関係構築のためのコミュニケーションの活用
⑦	平良由香利，梶山直子，室伏圭子ほか（2017）	シャドーイングを通して学生がどのような学びを得ているのかを質的帰納的に探索し，今後の成人看護学実習における質の向上を図るための示唆を得る	質的研究	大学3年生	成人看護学実習	実習初日に約4時間，学生が受け持つ予定の患者を担当している看護師をシャドーイング	シャドーイング後に記入した日々の実習記録	シャドーイングから得た学び（9カテゴリー） ・様々な疾患・病状の患者に必要な看護があることを理解 ・看護師の技のすごさを肌で実感 ・安全確保・個人情報保護の大切さとその実際を理解 ・的確な知識，手技，心配りの重要性を再認識 ・ケアの効率性と優先順位を考慮する必要性を実感 ・チーム医療とは何かを肌で実感 ・アセスメントの複雑さを実感 ・自己の学習に活用したい学び ・患者の治療や回復過程の体験を理解
⑧	石渡智恵美，菱刈美和子，樣田紗季子ほか（2016）	成人看護学の周手術期・回復期看護実習における看護学生が達成感に至った感情・思考・行動のプロセスを明らかにし，今後の実習指導と教育支援の示唆を得る	質的研究	短期大学3年生	成人看護学実習（周手術期・回復期）	3週間のうち，2日目に病棟オリエンテーションとシャドーイング	半構造的面接調査	シャドーイング実習による【周手術期・回復期一連の流れを理解】を活用した

文献番号	著者（発行年）	研究目的	研究デザイン	研究対象者	領域	実習スケジュールとシャドーイングの対象者	データ収集方法	結　　果
⑨	高下智香子，加藤かすみ（2015）	シャドーイングによる看護実践統合実習での，記述では明らかにならなかった学生の学びをインタビュー調査により明らかにする．学生の学びとは，体験したこと，その場その時で感じたこと，気づいたこと，疑問を明らかにできたことと定義する	質的研究	看護専門学校（3 年 課程）3 年生	統合実習	日勤帯（5 日間）： リーダーあるいはメンバー看護師にシャドーイング 夜間実習（1 日間）： 夜勤看護師一人にシャドーイング	半構成面接法	看護実践統合実習での学生の学び（5 カテゴリー） ・看護の明確化 ・連携・コミュニケーション ・患者への対応 ・看護師像のイメージ化 ・看護師に対する期待と不安の自覚
⑩	谷多江子，宮林郁子，安藤満代ほか（2015）	シャドウイングを通して学生が精神科看護師から学んだことを明らかにする	質的研究	大学3~4年生	精神看護学実習	実習期間中の半日 看護師をシャドウイング	学生の記録	5 つの視点で観察された看護ケア，言動の特徴のカテゴリー アセスメントスキル ・様々な視点から精神・身体症状をアセスメントする ・あらゆる機会を使ってアセスメントする ・意図的にアセスメントする コミュニケーションスキル ・治療的なコミュニケーション技術を駆使する ・あらゆる機会にコミュニケーションをとる 臨床判断 ・患者の個別性に合わせ柔軟に判断・対応する ・精神科に特有なリスクマネジメント ・患者の状態や必要なケアを多角的に判断する 時間管理 ・意図的に時間を使う ・洗練された動きをする 専門職としての態度 ・患者の役割モデルとしての態度 ・治療チームの調整を図る ・人的な治療環境としての自覚を持つ姿勢 ・教育的に関わる
⑪	中島艶子，内田日登美，遠藤利美（2014）	A 看護師養成所（3 年課程）における夜間実習の実態と課題を明らかにする	質的研究	3 年課程の学生	統合実習	実習終了日の前日 15：30～21：00 夜勤看護師のシャドウイング	質問紙	・学習全体が理解できた理由 日中とは異なる見学や体験 夜間の看護師の活動 夜間の大変さの実感（責任の重さ，担当患者の多さ，スタッフが少ない，優先順位を考えての対応）
⑫	長田艶子（2013）	周手術期におけるシャドーイングの実施状況を明らかにする。また，シャドーイングの効果・必要性に対する学生の反応を知り，今後の実習方法を検討する	質的研究	大学 3 年生	成人看護学実習（周手術期）	受け持ち患者の不在時期	調査用紙	シャドーイングに対する意見 ・受け持ち対象者への看護を考えるにあたって，シャドーイング実習が重要な役割を果たす ・1 週目にシャドーイングすると自分が受け持ったときにやりやすい ・受け持ち患者の看護計画などイメージがつきやすい
⑬	堀　香純，柴田恵美，田山友子（2013）	実習終了後に実施したアンケート調査からシャドウイングを行う効果について明らかにする。またその結果から，今後の実習の方向性の検討のための基礎的資料を得る	質的研究	看護専門学校（3 年 課程）1 年生	基礎看護学実習	病棟実習 4 日間の中で，半日もしくは 1 日，病棟スタッフ 1 名に学生 2～3 名がシャドウイング	アンケート	シャドウイングによる自身への影響の内容（4 カテゴリー, 11 サブカテゴリー） 看護師の活動の特徴 ・効率的な行動 ・コミュニケーションの実際 ・連携と調整の実際（チーム医療） ・看護活動のイメージ化 看護への興味・関心 ・憧れ・ロールモデルの獲得 ・モチベーションの向上 ・やりがい 倫理の必要性 ・倫理観 学習することへの必要性 ・学習内容の目的の明確化 ・知識の必要性 ・体力の必要性 ・意識の高まり
⑭	宮城真樹，島名美樹，小田心火ほか（2013）	夜間実習（精神科病棟での準夜勤帯での実習）を履修した学生の経験内容を明らかにすることにより，実習の成果および課題を検討する	質的研究	大学 4 年生	精神看護学実習	16 時～22 時までの夜間実習 看護師 1 名に学生 1～2 名がシャドウイング	フォーカスグループ・インタビュー	夜間実習における学生の経験（8 カテゴリー） ・目的，目標の受け止め ・実習の設定に対する評価 ・シャドウイングという実習方法への評価 ・担当看護師との関係性 ・振り返りのための時間と手段 ・実習後に残る不全感 ・看護師の実践に対する洞察的な理解 ・夜勤業務に対する感覚的な理解
⑮	高下智香子，常石光美（2013）	シャドーイングによる統合実習での学生の認識と指導者の認識を明らかにする	質的研究	看護専門学校 3 年生	統合実習	チームメンバー（4 日間），チームリーダー（1 日），夜間（1 日） 看護師 1 名に学生 1 名がシャドーイング	質問紙調査	学生の学びの自由記述 ・優先順位の判断 ・限られた時間の中での効果的な時間の使い方 ・予定された時間までの時間の使い方 ・情報収集の仕方情報共有の必要性 ・与薬における医療安全対策 ・院内感染予防対策 ・看護チーム内での連携の取り方 ・見習うべき看護師の姿勢
⑯	吉武美佐子，星美和子，藤川真紀ほか（2020）	基礎看護学実習における焦点及び実習目標や内容の変更により，学生のヒューマンケアリング体験にどのような違いがあるのかを学生レポートの比較による分析する	質的研究	大学 2 年生	基礎看護学実習	実習期間は 5 日間 看護師のシャドーイング	学生のレポート	2015 年度の係り受け頻度分析上位 5 位 ・援助–行う ・患者–コミュニケーション ・コミュニケーション - とる ・話–聞く ・患者–話 ・患者–考える 2016 年度の係り受け頻度分析上位 5 位 ・ヒューマンケアリング–感じる ・コミュニケーション–とる ・ヒューマンケアリング–思う ・患者–コミュニケーション ・必要–考える
⑰	岩月すみ江，所澤好美（2014）	A 校の統合実習における学生の学びをレポートの記述から明らかにするとともに，今後の統合実習のための基礎資料とする	質的研究	看護専門学校 3 年生	統合実習	シャドーイングの次の日に複数受け持ちの看護実践を 3 回繰り返す	学生のレポート	シャドーイングの学び（8 カテゴリー） ・観察 ・チームナーシング ・判断 ・看護の態度 ・時間 ・チーム医療 ・医療安全 ・スタンダードプリコーションの再認識

3 日間 2 件，4 日間 1 件，5 日間 1 件，6 日間 2 件，スケジュールの記載のない文献が 2 件であった．このうち夜間帯の実習を含むものが3 件であった．

シャドーイングの対象は，スタッフ看護師のみが 12 件，スタッフ看護師と看護管理者あるいはリーダー看護師が 5 件であった．データ収集方法は，

学生の実習記録またはレポートへの記載内容 10 件, インタビュー3 件（このうちフォーカスグループ・インタビュー1 件），質問紙 4 件であった.

2．シャドーイング実習による学びについて（表 2）

17 文献から 136 記録単位を抽出した．そのうち,「振り返りのための時間と手段」や「ヒューマンケアリングー思う」などシャドーイング実習による学びを読み取ることのできない 7 記録単位を除外し, 129 記録単位を分析対象とした．シャドーイング実習による学びについて類似した内容ごとに再構成した結果，10 のテーマに分類できた．以下，それぞれのテーマについて説明する．〈　〉は文献内のカテゴリー,〈　〉内の丸数字は表 1 の文献番号を示す.

1）患者の個別性をとらえた看護ケアの実際

このテーマは 10 のテーマの中でもっとも多い, 26 記録単位から形成された.

学生はスタッフ看護師のシャドーイングを行うことで〈バイタルサインの測定方法③〉や〈患者の状態に応じた排泄援助③〉だけでなく，統合実習でも 1 年次の基礎看護学実習でも〈自立に向けた ADL 拡大の援助③〉や〈在宅でその家族らしい最

表 2　シャドーイング実習による学び

テーマ（記録単位数）	文献の結果（代表的な記録）　※丸数字は文献番号
患者の個別性をとらえた看護ケアの実際（26 記録単位）	・バイタルサインの測定方法③
	・患者の状態に応じた排泄援助③
	・自立に向けた ADL 拡大の援助③
	・在宅でその家族らしい最期を迎えるための支援④
看護師が提供するコミュニケーション技術（12 記録単位）	・あらゆる機会にコミュニケーションをとる⑩
	・治療的なコミュニケーション技術を駆使する⑩
	・職員，患者家族と信頼関係構築のためのコミュニケーションの活用⑥
看護師のアセスメントの視点の多様さ（6 記録単位）	・アセスメントの複雑さを実感⑦
	・様々な視点から精神・身体症状をアセスメントする⑩
実習を円滑に進めるために必要な学生の行動（12 記録単位）	・看護師さんと会話ができたことで、受け持ちでの担当時にスムーズに相談・報告ができた①
	・1 週目にシャドーイングすると自分が受け持ったときにやりやすい⑫
効率的な看護業務実施の必要性（11 記録単位）	・限られた時間の中での効果的な時間の使い方⑮
	・優先順位を考えての対応⑪
	・多重課題に対応する実践的思考⑤
医療安全管理の重要性（7 記録単位）	・安全管理の重要性②
	・与薬における医療安全対策⑮
看護管理の機能（5 記録単位）	・看護管理者の役割⑥
	・看護の質向上に向けた看護管理②
多職種チーム内での看護師の役割（17 記録単位）	・チームの一員としての責任と役割の遂行②
	・多職種連携の実際と看護師としての役割発揮⑥
	・看護チーム内での連携の取り方⑮
看護専門職者としての姿勢や態度（23 記録単位）	・看護師の技のすごさを肌で実感⑦
	・憧れ・ロールモデルの獲得⑬
	・見習うべき看護師の姿勢⑮
自己の課題を意識化することの重要性（10 記録単位）	・専門領域の看護実習に向けた自己の課題の明確化⑤
	・知識の必要性⑬

期を迎えるための支援④〉などを学んでいた.

2）看護師が提供するコミュニケーション技術

このテーマは 12 記録単位から形成された.

学生はスタッフ看護師のシャドーイングによって,〈あらゆる機会にコミュニケーションをとる⑩〉ことを学んでいた．さらに,〈治療的なコミュニケーション技術を駆使する⑩〉ことや〈職員，患者家族と信頼関係構築のためのコミュニケーションの活用⑥〉などついても学んでいた.

3）看護師のアセスメントの視点の多様さ

このテーマは 6 記録単位から形成された.

学生はスタッフ看護師をシャドーイングすることによって，実習期間が一日以内であっても〈アセスメントの複雑さを実感⑦〉し,〈様々な視点から精神・身体症状をアセスメントする⑩〉ことを学んでいた.

4）実習を円滑に進めるために必要な学生の行動

このテーマは 12 記録単位から形成された.

学生は実習初日のシャドーイングによって〈看護師さんと会話ができたことで，受け持ちでの担当時にスムーズに相談・報告ができた①〉とスタッフ看護師に声をかけるタイミングを学んでいた．また,〈一週目にシャドーイングすると自分が受け持ったときにやりやすい⑫〉と実習の進め方を学んでいた.

5）効率的な看護業務実施の必要性

このテーマは 11 記録単位から形成された.

スタッフ看護師のシャドーイングによって学生は〈限られた時間の中での効果的な時間の使い方⑮〉や〈優先順位を考えての対応⑪〉について学んでいた．さらに看護管理者のシャドーイングを行うことで〈多重課題に対応する実践的思考⑤〉を学んでいた.

6）医療安全管理の重要性

このテーマは 7 記録単位から形成された.

学生は統合実習において看護管理者やリーダー看護師のシャドーイングをすることで〈安全管理の重要性②〉を学んでいた．また，スタッフ看護師のシャドーイングから〈与薬における医療安全対策⑮〉についても学んでいた.

7）看護管理の機能

このテーマは 5 記録単位から形成された．領域はすべて統合実習であった.

学生は看護管理業務をシャドーイングすることで,〈看護管理者の役割⑥〉や〈看護の質向上に受けた看護管理②〉について学んでいた.

8）多職種チーム内での看護師の役割

このテーマは 17 記録単位から形成された.

学生は統合実習でのシャドーイングを通して〈チームの一員としての責任と役割の遂行②〉を学び,〈多職種連携の実際と看護師としての役割発揮⑥〉や〈看護チーム内での連携の取り方⑮〉も学んでいた.

9）看護専門職者としての姿勢や態度

このテーマは 23 記録単位から形成された.

学生はシャドーイングによって〈看護師の技のすごさを肌で実感⑦〉し，1 年生の基礎看護学実習でも〈憧れ・ロールモデルの獲得⑬〉ができ,〈見習うべき看護師の姿勢⑮〉を学んでいた.

10）自己の課題を意識化することの重要性

このテーマは 10 記録単位から形成された.

学生は基礎看護学実習においてもシャドーイングから〈知識の必要性⑬〉を学び，さらに〈専門領域の看護実習に向けた自己の課題の明確化⑤〉の重要性を学んでいた.

Ⅵ．考　　察

1．シャドーイング実習による学びの効果

本研究の結果から，シャドーイング実習における学びの効果として，看護過程の展開に必要な知識や技術の修得，看護職としての実務の理解，看護専門職者としてのあり様の理解の 3 点が挙げられる.

文献検索で抽出され除外対象となった文献レビュー3件[30-32]は，いずれも「看護の統合と実践」の臨地実習に焦点を当て，実習内容を検討するために行われていた．本研究は領域を限定せずに学生の学びの効果について明らかにしている点で，新たな知見が得られたと考える．

1）看護過程の展開に必要な知識や技術の修得

本研究で明らかになった10のテーマのうち，「患者の個別性をとらえた看護ケアの実際」,「看護師が提供するコミュニケーション技術」,「看護師のアセスメントの視点の多様さ」は，学生が実際の看護過程を展開していく際にどのような知識や技術が必要なのかをシャドーイング実習によって学ぶことができたと考えられた．

学生は看護師の〈治療的なコミュニケーション技術を駆使する⑩〉姿から講義で学んだことを実際の看護の現場でどのように用いれば良いのかを体感し,〈あらゆる機会にコミュニケーションをとる⑩〉ことがアセスメントにつながることを実感したと考える．さらに，記録単位の多かった「患者の個別性をとらえた看護ケアの実際」では看護技術だけでなく基礎看護学領域では〈自立に向けたADLの拡大の援助③〉，成人看護学慢性領域では〈在宅でその家族らしい最期を迎えるための支援④〉など実習領域に特有の看護について学ぶことができていた．また，患者の状態の変化が速い周手術期では学生の看護計画が後追いになることが推察されるが，事前に看護師のシャドーイングをすることで一連の流れの理解でき，その後の学生自身の看護過程の展開に役立てることができたと考える．長田[11]もシャドーイングが看護過程の全般にわたって良い効果をもたらす可能性があると述べており，看護過程の展開に必要な知識や技術の修得につながると考えられる．

2）看護職としての実務の理解

本研究で明らかになった10のテーマのうち，学生が患者を受け持って看護過程を展開する実習だけでは理解することの難しい「効率的な看護業務実施の必要性」,「医療安全管理の重要性」,「看護管理の機能」,「多職種チーム内での看護師の役割」について学ぶことができていた．今回の文献レビューでは，統合実習の文献が約半数であり，夜間帯の実習に関する文献も3件[21,23,26]含まれていたことから看護職としての実務に即した学びについてのテーマが形成されたと考えられ，実習領域に関わらずに学生は学ぶことができていた．

多くの領域別実習では患者一人に対して学生1～2名で受け持ち看護過程を展開しており，受け持ち患者と教員または指導者との時間調整ができれば日々の実習を進めることができる．一方で，実習病棟の看護師は複数の患者を受け持つことが一般的である．したがって，学生はシャドーイング実習によって〈限られた時間の中での効果的な時間の使い方⑮〉を学ぶことができ，職業としての看護職の理解につながると考えられる．また，佐居ら[33]は，新人看護師の経験しているリアリティショックの一つに他職種との協働におけるとまどいを挙げているが，学生はシャドーイング実習によって看護チームだけでなく多職種チームの中での看護師の役割についても学ぶことができていた．

さらに，学生はシャドーイング実習によって，他のテーマと比較して記録単位は少ないが〈与薬における医療安全対策⑮〉や〈看護の質向上に受けた看護管理②〉といった，講義だけでは理解することが難しい看護師の役割についても学ぶことができていた．また，学生のうちに〈看護管理者の役割⑥〉を学ぶことによって，看護管理者が何をしているのか実務レベルでの理解につながり，病院に就職した際にはメンバーシップを発揮することができると考える．以上から，シャドーイング実習は病院で働く看護職としての実務を理解できるという効果があり，リアリティショックの軽減につながり新人看護師の離職防止への貢献が期

待できる．

3）看護専門職者としてのあり様の理解

本研究で明らかになった10のテーマのうち，「看護専門職としての姿勢や態度」,「自己の課題を意識化することの重要性」から，学生は看護専門職者としてのあり様の理解につなげていたと考えられる．

本研究の結果から，学生は看護師に同行することで〈看護師の技のすごさを肌で実感⑦〉し,〈憧れ・ロールモデルの獲得⑬〉につなげていた．役割モデルが存在しない新卒看護師は役割モデルが存在する看護師よりも3倍近く離職をしやすいという報告もあり[34]，シャドーイング実習を通して看護師としての将来の自分をより具体的にイメージすることができ，役割モデルを見いだすことができれば，新人看護師の離職防止につながると考えられる．

また，学生は〈知識の必要性⑬〉を感じて自己の課題の明確化につなげるなど，シャドーイング実習によって専門職として継続して学修することの重要性を理解できたのではないかと考える．

2．役割移行実習への示唆

本研究の結果から，シャドーイング実習の期間や領域に関わらず，学生は看護過程の展開に必要な知識や技術の修得だけでなく，看護職としての実務を理解し，看護専門職としてのあり様の理解につながることが明らかになった．役割移行実習の目的は学修者である看護学生と職業人である看護職者の役割及び機能の相違について学修することであり，文献レビューの結果からシャドーイング実習は役割移行実習の目的の達成に適した実習方法であったと考える．また，新人看護師の成長のプロセスには自己の課題の明確化や理想の看護師像を抱くことが挙げられている[35]が，本研究の結果から看護基礎教育でも自己の課題の明確化や看護師のイメージ化をすることができていた．

新人看護師のリアリティショックは就職後3～6か月持続すると言われており[36]，適切に解消されなければ離職につながることが考えられる．就職後3か月間はシャドーイングによる研修の効果があると認識され，就職後半年の時点でもシャドーイングによる研修を肯定的に見ている意見が多かった[7]ことから，本学で計画している2月下旬から3月にかけての役割移行実習は新人看護師の離職予防にも適した時期であると言える．

さらに,学生はシャドーイング実習によって「実習を円滑に進めるために必要な学生の行動」を学ぶことができていた．病棟での実習は学生にかなりの緊張感をもたらすと想像するが，シャドーイング実習は実習の導入を促進する効果がある[19]と言われている．したがって，今後は実習期間の前半にシャドーイング実習を組み入れ，後半には患者を受け持つ実習を組み合わせることで，より具体的に看護職のイメージ化を図ることができると考える．また，新人看護師の職業継続には役割モデルの存在が重要である[34]ことを考えるとロールモデルとなる看護師の選出が重要である．さらに学生は看護師に同行して経験したことを見落としている可能性もあり，教員や指導者が学生の経験を学びや成長に昇華させていく意図的な関わりが不可欠[25]であることを念頭に置き，実習病院との調整を図っていく必要がある．

3．本研究の限界と今後の課題

本研究で選択した文献の研究対象者は学生であり，データとして得られている学生の学びはシャドーイング実習の影響とともに実習目標や目的の影響を受けている可能性があるため，シャドーイング実習の学びのみを結果として示すことが困難であることが本研究の限界である．

今後は，シャドーイング実習について教員側，指導者あるいは病院側の評価について明らかにすることが課題である．

Ⅶ. 結　　論

17 論文からシャドーイング実習の学びとして「患者の個別性をとらえた看護ケアの実際」「看護専門職としての姿勢や態度」などの 10 のテーマが明らかになり，看護過程の展開に必要な知識や技術の修得，看護職としての実務の理解，看護専門職者としてのあり様の理解の 3 つの効果が明らかになった．これらの結果から，役割移行実習にシャドーイングの実習方法を用いることは適切であると考えられた．今後の役割移行実習について患者を受け持つ実習との組み合わせやロールモデルとなる看護師の選出，教員や指導者の意図的な関わりについて検討する必要性がある．

利益相反

本研究における利益相反はない．

引用文献

1）日本看護協会政策企画室編（2005）：2004 年病院における看護職員需給状況調査，日本看護協会調査研究報告，73：12

2）鈴木英子（2007）：新卒看護師の早期退職に関する文献研究，看護，59(12)：89−93

3）下田真梨子（2014）：看護師の離職に関する文献検討，高知大学看護学会誌，8(1)：29−38

4）有村優範（2019）：病院に就職した新人看護師に関する研究の動向　職場適応，職業継続意思，離職に焦点をあてた文献検討，愛知県立大学看護学部紀要，25：33−45

5）日本看護協会中央ナースセンター事業部（2006）：2005 年新卒看護職員の入職後早期離職防止対策報告書：25−33

6）塚原節子, 四十竹美千代, 永山くに子（2007）：新人看護師の離職防止に向けたシャドウ研修の意義，看護管理，17(3)：234−236

7）山口千鶴子，佐藤ゑい子（2007）：新人看護師の早期離職防止にシャドウ研修を導入して，看護管理，17(3)：237−242

8）村川由加理, 作田裕美, 永井春歌ほか（2020）：救命救急センターにおけるシャドウイング教育後の新人看護師の気づき, 日本救急看護学会誌，22：1−9

9）大江真人，塚原節子，長山　豊ほか（2014）：新卒看護師が職業継続意思を獲得するプロセス，日本看護科学会誌，34：217−225

10）厚生労働省　看護師等養成所の運営に関する指導ガイドライン　https://www.mhlw.go.jp/content/000936881.pdf

11）長田艶子（2012）：周手術期看護学実習におけるシャドーイングの必要性，奈良県立医科大学医学部看護学科紀要，8：52−56

12）牧本清子（2013）：エビデンスに基づく看護実践のためのシステマティックレビュー，75−91，日本看護協会出版会，東京

13）石渡智恵美（2020）：周手術期看護実習における看護実践能力育成方法の検討　シャドーイング実習での学びと今後の課題, 総合学術研究，3：63−70

14）竹﨑和子，高尾茂子（2019）：A 大学看護学生の統合実習における看護管理に関する学び，インターナショナル Nursing Care Research，18(1)：77−85

15）小林裕子，藤井光輝，片山善友ほか（2018）：基礎看護学実習における看護師のシャドーイングを通しての学生の学び，国立病院看護研究学会誌，14(1)：35−45

16）森　京子，古川智恵（2017）：講義とシャドウイングを併用したがん終末期看護学実習における学び　急性期病院と在宅緩和ケア施設での実習を通して，日本医学看護学教育学会誌，26(1)：27−35

17）岡田麻里, 今井多樹子, 井上　誠ほか（2017）：既修の知識と技術を統合する多重課題演習とシャドウイング実習から得られた 3 年次看護学生の学び，日本看護科学会誌，37：446−455
18）岩坂信子，尾形裕子（2017）：継続統合看護学実習におけるジョブシャドウイング導入による看護マネジメントに関する学生の学び，北海道文教大学研究紀要，41：97−107
19）平良由香利, 梶山直子, 室伏圭子ほか（2017）：看護大学生が成人看護学実習におけるシャドーイングから得た学び，医療職の能力開発，4(1)：1−9
20）石渡智恵美，菱刈美和子，楳田紗季子ほか（2016）：周手術期・回復期看護実習における達成感のプロセス，日本看護学会論文集　急性期看護，46：301−304
21）高下智香子，加藤かすみ（2015）：看護実践統合実習でのシャドーイングによる学生の学びと効果　インタビュー調査を行って，中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌，10：9−12
22）谷多江子，宮林郁子，安藤満代ほか（2015）：精神科看護師のシャドウイングを通しての学生の学び，日本看護学教育学会誌，24(3)：75−88
23）中島艶子，内田日登美，遠藤利美（2014）：夜間実習の実態～リアリティを伴う学び～，松村総合病院医学雑誌，28(1)：50−52
24）長田艶子（2013）：周手術期実習におけるシャドーイングの実態調査　学生アンケートによる検討，日本看護学教育学会誌，23(1)：53−61
25）堀　香純，柴田恵美，田山友子（2013）：基礎看護学実習 I でのシャドウイングによる看護学生の学びの効果，東京医科大学看護専門学校紀要，23(1)：31−36
26）宮城真樹，島名美樹，小田心火ほか（2013）：学生の経験に基づく夜間実習の成果と課題の検討，東邦看護学会誌，10：15−22
27）高下智香子，常石光美（2012）：シャドーイングによる統合実習での学生の学びの認識と指導者の指導の認識の実態，中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌，8：292−295
28）吉武美佐子, 星美和子, 藤川真紀ほか（2020）：看護学生が基礎看護学実習を通して体験したヒューマンケアリングの分析；実習目標の違いによる比較，福岡女学院看護大学紀要，10
29）岩月すみ江，所澤好美（2014）：シャドーイングと看護実践を反復する統合実習での看護学生の学び，札幌保健医療大学紀要，1：43−54
30）鈴村初子, 春田佳代, 相撲佐希子ほか（2019）：過去 6 年間の統合実習の状況に関する文献検討，修文大学紀要，10：59−67
31）堀　陽子，上山直美（2019）：「看護の統合と実践」実習に関する文献検討　第 4 次カリキュラム適用後の学生の学びから，宝塚大学紀要，32：247−262
32）中田芳子（2017）：統合実習に関する文献検討，東海大学短期大学紀要，50：71−76
33）佐居由美, 松谷美和子, 平林優子ほか（2007）：新卒看護師のリアリティショックの構造と教育プログラムのあり方，聖路加看護学会誌，11：100−108
34）富永真己（2015）：看護職を惹きつける組織を目指して―先行研究からみえてきた課題―，保健医療社会学論集，25：27−32
35）田中いずみ，比嘉勇人，山田恵子（2015）：看護実践における新人看護師の成長プロセス，富山大学看護学会誌，15：1−16
36）坂井利衣（2020）：病院に就職した新人看護職者の職場適応プロセスに関する研究の動向と課題，神戸常盤大学紀要，13：16−27

A Review of Japanese Literature on Learning through Shadowing Practice in Basic Nursing Education

Hiroko Shimizu and Yasuko Osawa
Gunma Prefectural College of Health Sciences

Objective: The objectives of this study were to summarize learning through shadowing practice in basic nursing education and obtain suggestions for role transition practice at this university.

Methods: As a result of a literature search, 17 original articles were selected for analysis. The research objectives and methodologies of the articles were reviewed, and categories of results related to learning through shadowing practice were extracted and reorganized by similar content to form themes.

Results: Ten themes regarding learning from shadowing practice were identified, including "actual nursing care that captures the individuality of the patient" and "posture and attitude as a nursing professional". In addition, three effects were identified: acquisition of knowledge and skills necessary for the development of the nursing process, understanding what is in-line with practical nursing work, and understanding what it means to be a nursing professional. The three effects of the study were: acquisition of the skills necessary to develop the nursing process, learning what is relevant to practice as a nurse, and understanding how to be a nursing professional.

Conclusion: The use of shadowing as a practice method in role transition training was appropriate. In the future, the selection of nurses to serve as role models and the intentional involvement of teachers and instructors need to be considered.

Keywords: basic nursing education, shadowing practice, literature review